

My Antonia 再考 —性意識と偶像化のパラドックス—

角 田 俊 治

A Study on Willa Cather's *My Antonia* —A Paradoxical Relationship without Sexuality—

Shunji Tsunoda

Abstract Willa Cather's *My Antonia* written in 1918 had been regarded as the novel depicting the life of a woman who lived in the Western frontier, eulogizing the agrarian way of life in the past pioneering days. Indeed, the book is full of description about human efforts against land and taming of it into fertile farm, and, also, it depicts the land-related image and the fecundity of the heroine, Antonia Shimerda, who is metaphorically expressed as “a rich mine of life.” Though this manner of reading is never wrong in itself, it became clear in the late 70s that sexuality, lurking in the mind of the narrator Jim Burden or in the lesbian or androgynous disposition on the author's side, constitutes the dominant factor in his depicting Antonia's story. Further, many critics have discussed since its publication the problem as to which of the two characters is the true protagonist of the novel. In this paper, on the premise that *My Antonia* is the story of Jim Burden himself and of his confession about what Antonia meant to him, we will discuss how Jim Burden's psychosexual conflicts affects the progress of the story and his description of the heroine, and see how Antonia's fecundity, to which he ought to have had no physical relation, has the decisive relevance in providing Jim Burden with his salvation and his very bright future.

Key Words: sexuality, idealization, relationship, Antonia, Jim Burden

1918年出版の Willa Cather の代表作 *My Antonia* に対する批評家たちの解釈は、1970年代から大いに変化した。それまでこの作品は西部の大地に生きた女性 Antonia Shimerda の人生を礼賛したもの、古き良き開拓時代の Nebraska を舞台とし、開拓者の女性の半生を描いた牧歌的、あるいは叙事詩的読み物とする見方が主流であった。ところがこの *My Antonia* を、語り手である Jim Burden の sexuality と関連づけ、さらには女流作家 Willa Cather 自身の私生活から両性具有者の傾向あるいはレスビアニズム指向を嗅ぎ取って、これを極めて psychosexual な本であるとする見方が登場したのである。例えば、Blanche Gallant は、“The Forgotten Reaping-Hook: Sex in *My Antonia*” という画期的な論文の中で、Jim Burden を “self-deluded narrator”¹⁾ と呼び、この本が彼自身の “sexual disturbance, repression, and distortion” によって歪曲を受けているとした。かくして、研究者たちは作中で語られていること

以上に、そこで語られていないこと、Sharon O'Brien の表現を借りれば、“what *My Antonia* masked, transformed, displaced, repressed, and omitted”²⁾ を探るようになる。いずれにせよ、Willa Cather が性の描写に対して抱く嫌悪感や性そのものへの恐怖感が、彼女が創造した語り手 Jim Burden の性格形成と、彼によるヒロイン Antonia の描写に決定的な影響を与えていることは間違いない。これは Herman Lee が言うように一面では “a very sexy book”³⁾ なのである。もっとも Willa Cather の性に対する態度については、早くも1960年に J. H. Randall が指摘していたことである。

...she was bent on devaluing some of the devastating conflicts that occur in life, particularly those relating to sex.⁴⁾

Randall のこの指摘の正しさは認められながらも、それに対しては次のような弁護がなされてきた。

Sexual love is not present in the here and

now...the knowledge of just what to touch and what not to touch is the best interest of her destiny.⁵⁾

一方、Willa Cather 自身の *My Antonia* に対する下記のような言もある。

I decided in writing it I would dwell very lightly on those things that a novelist would ordinarily emphasize, and make up my story of the little, every-day happenings and occurrences that form the greatest part of everyone's life and happiness.⁶⁾

作者は Antonia Shimerda の物語を語るのに、男性の Jim Burden という視点を使いながら、男女の間で当然に起こるはずの “sexual love” を避ける、もしくは表面に出さない筋立てを行ったわけである。結果として、W.J.Stucky が述べるごとく、

From the standpoint of ordinary human behavior, Jim Burden's interest in Antonia is unconvincing.⁷⁾

とする一定の説得力を持つ見方もでてくる。しかしながら、これを Willa Cather に託された Jim Burden という、極端に “romantic disposition” の強い男性の語り、つまり、narrator 自身の自己実現の物語として読めば、彼の生き方と性格の分析からこの本の価値を汲み取る読み方が可能となる。

1918年版の *My Antonia* は Willa Cather 自身の手によって1926年に “Introduction” の部分が書き換えられ、長年後者が読まれてきた。しかしながら現在では Jim Burden の心理を分析するためには初版の Introduction の方がより興味深いことも一因となって、Nebraska 大が出版した scholarly edition も含め、改定前の1918年版をテキストとすることが多い。いずれの版においても、「現在」は New York に住み西部の鉄道の顧問弁護士となっている Jim Burden と、彼の妻との結婚生活が破綻していることが語られる。2人の間には子供がない。とりわけこの事実は、本作品の主題を検討する上でも、そして本論文の論点にとっ

ても直接的な意味をもつ。また1918年版の Introduction においては、「現在」の不幸な家庭生活を送っている Jim Burden が、夢とアイデアにあふれた西部の若者達の新しい事業に資金の援助をし、彼らを世に出すことに楽しみを見出している旨の言及がある。これについては後で検討する。

さらには Jim Burden による Antonia の回想録執筆の事情の設定にも根本的な違いがある。改訂版では、多分職業作家であろうが性別もはっきりしない “I” という人物を、数ヶ月前西部に向かう列車上で偶然出会った同郷の Jim Burden が訪れ、Antonia の思い出を書き留めた portfolio を遠慮がちに見せるという設定になっている。しかしながら1918年版においては、列車上で Willa Cather らしき人物⁸⁾と Jim Burden が、二人でそれぞれに Antonia に関する記憶を書き綴ろうということになる。ところが Jim Burden が “I” のもとを訪れると、“I” は “a few straggling notes” 以上のものを書けないでいる。Jim は小脇に抱えた “a bulging portfolio” を幾分自慢げに叩いてみせる。彼の pride と思い出の記完成の喜びに満ちた様子は記憶しておく必要がある。不毛の結婚生活をし、自らの生き甲斐とすべき子供もない「現在」の彼にこれほどの喜びを与える結果となったものは何であろうか。それは Antonia のどのような資質であったのだろうか。

本論文のテーマは生命力豊かなボヘミア移民の女性 Antonia Shimerda を理想化する語り手 Jim Burden の性意識、性への恐れや嫌悪、性欲への罪悪感、Susan Rosowski のいう “distorted sexuality” が如何なる形で彼の記述の中に表われ、もしくはその裏側に隠されているのかを見ること、そして「現在」の不幸な家庭生活を送っているはずの彼が、終章 Book V: Cuzak's Boys において如何にして salvation を得ることができ、高揚した気分 Antonia と自分との運命的な繋がりを書くに至ったかを検討することにある。

Virginia から Nebraska の開拓地の祖父母のもとへやって来た孤児の Jim Burden が、Bohemia

移民の娘 Antonia と初めて会うのは10歳の時であり、この時 Antonia は14才である。作者はこの年齢差を、しかも女性である Antonia を4才年上に設定していることで、二人の間に一般的な恋愛が成立しにくい状況を作っている。

BOOK I: The Shimerdas において、Jim Burden の Antonia への屈折した心理が示唆されるのは彼のガラガラ蛇退治のエピソードである。ある日二人は prairie-dog のコロニーに行き、そこで巨大なガラガラ蛇に出会う。Jim は自分でも理由が解らないままにこの蛇に対して激しい憎悪を抱き、たまたま持っていた spade で殺す。この蛇の “abominable muscularity, his loathsome, fluid motion” に吐き気をよおしながら、彼が蛇を叩き殺す様は凄絶である。

I ran up and drove at his head with my spade, struck him fairly across the neck, and in a minute he was all about my feet in wavy loops. I struck now from hate.... Even after I had pounded his ugly head flat, his body kept on coiling and winding, doubling and falling back on itself...(44)⁸⁾

無論この蛇のエピソードは単に Jim の回想録に厚みを加えているだけのものではない。“the ancient, eldest Evil” と形容されるこのガラガラ蛇は、Eden の園に現れた蛇を示唆するもの、従って innocence の世界から experience の世界へと誘う蛇でもある。Jim はその蛇を徹底的に退治する。かくしてこの冒険は Jim の adolescence の世界への initiation の儀式的意味を持つ。

そしてこの蛇は Jim の中に性が目覚めつつあることを暗示する。Jim が Antonia を自分の理想の女性として偶像視していくためには、彼は自らの中の性的な部分を検閲し否定していかなければならず、それを意識のレベルにまで解き放つ訳にはいかない。性を “devalue” し、またそれに “touch” することを恐れ嫌悪する Willa Cather の agent たる Jim は、Antonia を一人の female sex として男性の目で見えることを自らに許してはならないのである。ここでの蛇との戦いは、自分

が Antonia と同等になるための戦いという以上に、Antonia を自分の理想の女性として奉じていくための条件、自らの中の性的な部分を押し殺すための戦いであった。蛇退治をしたことで、彼は “The great land had never looked to me so big and free.” と感じる。だがもちろん彼は “free” ではない。彼は自分の Antonia に対する sexual feeling を無意識のドメインに押さえ込まねばならない。そして自身がそれを意識するとしないと関わらず彼の “distorted sexuality” は彼の行動にあらわれて来る。

Jim がこの開拓地にやってきてから3年後、Jim と祖父母は Black Hawk の町に移り、13才の彼は学校に行き始める。数ヶ月後、Antonia は Jim の隣家の住み込みの料理番として Black Hawk の町にやってくることになり、二人は再びほぼ毎日顔を合わせる。青年期の彼の中には当然に、女性の sexuality への興味が生じている。その Jim の前に現れるのが、官能的魅力を発散する女性 Lena Lingard である。彼の心の奥ではこの Lena への性的意識が強くなって来ている。Lena は Jim の Antonia に対する “love” の性的な部分を surrogate しているのである。

ここで興味を引くのは Antonia の Jim に対する役割である。Antonia は Lena の性的魅力が Jim の将来に影響を与えるのを懸念しているのである。Antonia の Jim を見る目はあくまで、知的才能を持ち世俗的成功の potentiality を持った弟を守ろうとする姉あるいは母親の態度である。Jim は Antonia の意識とは無関係に、また自分自身の無意識の領域にあるものとは無関係に、彼女の protector を持って任じているが、Antonia もまた Jim の protector たらんとしているのである。しかも彼女の Jim に対する感情には信頼はあっても、恋愛感情や desire は皆無であり、また Lena に対する懸念も彼女への嫉妬からくるものではない。

Jim がハイスクールの最終学年となる頃、町に巡回の dancing pavilion がやって来る。その間彼はダンスを通じて女性たちと接触するようにな

る。彼の潜在意識のレベルにおいては、正常な男性ならば持つはずの sexual desire が確実に勢力を増しつつある。彼はあのエデンの蛇を殺したことで innocence の世界に続けて住むことを許されたかに見えたが、それは “a mock adventure” であったのだ。自らを自嘲的に騎士物語の dragon-slayer に例える Jim を、Susan Rosowski は “Jim himself is not the adventurer, the lover or the poet he pretends to be”¹⁰⁾ と言っているが、Jim の内部では自らが作り上げた理想像である Antonia を愛そうと思ひながら、あるいは愛していると思ひながら、正常な恋愛ならばそこに当然存在するはずの sexuality を押さえ込まねばならないことに起因する性的 distortion が形成されつつある。

彼は Lena Lingard に向かう自分の desire を Antonia に向けようと葛藤するが、それは必然的に Antonia への偶像視と矛盾する意識となる。このパラドックスは Jim が Antonia に口づけをしようとして拒否される場面に端的に示される。驚くべきことに彼は衝撃を受けるところか、逆に “so proud of her” と言って彼女への賞賛を新たにするのである。

Her warm, sweet face, her kind arms, and the true heart in her; she was, oh, she was still my Antonia! (218)

Jim の大いなる未来を最も信じているのは Antonia である。彼女は Jim の知的才能を開花させるためには、彼を sexuality の世界に近づかせてはならないと信じて疑わない。彼をその世界から保護するために口づけを拒否した Antonia を見て、Jim は彼女が自分の思い描いていたとおりの理想の女性だったと考える。Antonia と心の奥で繋がっていることを悟り、彼女の保護者、理解者そして崇拝者たらしめる彼は満足するのである。二人は厭わしい sexuality 抜きの人間関係を維持できるのであり、今後も Antonia を理想の女性として自分の shrine に奉じておくことができるわけである。彼は自身の価値観に照らして、彼女の真の価値を認識している自分を誇り、他の

若者たちに対する侮蔑を露わにする。Jim の distorted sexuality は明らかである。

I looked with contempt at the dark, silent little houses about me as I walked home, and thought the stupid young men who were asleep in some of them. I knew where the real women were, though I was only a boy; and I would not be afraid of them, either! (218)

ここで Jim に軽蔑される若者たちは dancing pavilion に来て、通常の性意識を持って同世代の女性たちと恋愛をし結婚する正常な若者たちである。ところが、Jim の崇拝する “real” な女性とは、自分の shrine に奉ずることのできる asexual な女性でなければならない。Willa Cather の agent である Jim の内部には性に対する恐怖と嫌悪があることは繰り返して述べた。故にこの引用の最後の一文は特別の意味を持つ。Jim の信奉する “the real women” とは sexuality を意識する必要のない女性なのであるから、“afraid” する理由などないのである。

この incident のあとに語られる Jim の見る二つの夢の描写は、彼の Antonia に対する上記の心的過程を裏付ける。彼が Antonia について見る夢は Black Hawk の町にやってくる前の、子供時代の二人の楽しい思い出の夢であり、性的な含みの無い “pleasant dreams” である。ところが彼は Lena Lingard についての erotic な夢を幾度も見るのである。

I was in a harvest field full of shocks, and I was lying against one of them. Lena Lingard came across the stubble barefoot, in a short skirt, with a curved reaping-hook in her hand, and she was flushed like the dawn, with a kind of luminous rosininess all about her. She sat down beside me, turned to me with a soft sigh and said, ‘Now they are all gone, and I can kiss you as much as I like.’ (218)

この夢の中の Lena Lingard は、Antonia との間に性意識なしの愛を全うしようとする Jim の内部の sexual desire が、彼の無意識の領域で

Lena へ転化されたものである。“senior in high school”の年齢となっているJimの潜在意識の中のdesireがLenaへ向かい、夢の中で昇華されているのである。さらにこの夢には、Lenaが“a curved reaping-hook”をもってJimの前に現れることから、そしてWilla Cather自身の性に対するfearとantipathyが示されている。Catherの全作品中でも最も魅力的な女性であり、性的魅力にあふれながらも、無垢、寛容、優美、家族愛、無欲、自立心等々、Cather自身の好む美德にあふれるLenaが、Jimの夢の中ではなんと戦慄すべき鎌を手を持って現れるのである。この鎌はJimの心の奥の彼自身にも見えないところにある、性への恐怖感のimageryとなっているのである。だが、これはあくまでJimの夢の中で起こることであり、彼女へのdesireは意識の表面に出てくる前にsubconsciousのレベルで押し留められてしまう。

結果として次のようなことが起こる。JimのAntoniaに対する心的過程を解釈する上での根拠となりうる一文である。

I wished I could have this flattering dream about Antonia, but I never did.(218)

JimはAntoniaを愛そうとする、あるいは愛していると思っている。しかしながら、W. J. Stuckyが“Jim does not love Antonia as a man would.”¹²⁾と述べているように、もともとsexualityの世界に潜在的な恐怖を抱くJimには女性を性愛の対象として愛することはできない。Stuckyの言葉を借りれば、JimはAntoniaを“hero-worship”しているだけなのである。Antoniaを相手とする“erotic dream”はJimには許されない。もっとも、その代償としてAntoniaへのidolizationを続けることができるのであって、いわば彼はこのLenaの夢によって守られているのである。ここで記憶しておくべきことは、彼のAntoniaとのsexualityなき関係はこの回想録の終了まで続き、しかも作者は決して、それによって彼の人生を不幸な結果に貶めることをしていない事実である。

さて、Black Hawk時代のJim Burdenの“distorted sexuality”を如実に示すincidentはBook II: Country Girlsの最後にもう一つ用意されている。これは彼がBlack Hawkの町を去る直前のincidentであり、重要な意味を持つ。Antoniaはダンスに熱中した結果、雇い主夫妻の怒りを買ひ、金銭の亡者で女性への執念も強い金貸しWick Cutterの家の住み込みの女中となる。ある夜、彼女に対するrapeの危険を感じた祖母の提案で、JimがCutterの家にあるAntoniaのベッドに寝ることになる。果たして、旅行中のはずのCutterが真夜中にAntoniaが寝ていると思ってJimを襲う。Jimは血まみれの顔で逃げ帰り、祖母以外の誰にも会わず自分の部屋に引きこもる。ここでJimの見せる心理と行動は、Antoniaに対して抱いてきたdistorted loveの顕われを示す。なんと彼の憎悪はAntonia自身に向けられるのだ。

I felt that I never wanted to see her again. I hated her as much as I hated Cutter. She had let me in for all this disgustingness.(242)

ここにおいて、彼のAntoniaに対するいびつな意識は頂点に達する。この憎しみはどこからくるのか。Antoniaへの危険を回避するために、つまり彼女を“protect”するために承知の上で、彼はCutterの家で寝たのである。自分は襲われたが、代わりに奉ずるものを救った。自分のadorationの対象たるAntoniaのための自己犠牲はむしろ彼にとって誇りとなってもよいはずである。実際、祖母はAntoniaがrapeされなかったことを“how thankful”と言い続けている。だが、Jimは到底そのような気にはなれない。彼の怒りと憎しみは、受けた傷の痛みからくるわけではもちろんない。それは何よりもまずAntoniaが男性の赤裸々な性欲の対象となったこと、彼女がsexualityを持つ女性であることをJimが見せつけられたことに他ならない。彼にはAntoniaが男性という性から見た“女性”であることが許せないのである。Book Iで彼はあの巨大な蛇を自らの力で退治し、自分のinnocenceの世界とAntonia

という偶像を守ろうとした。だが今や、彼女が“性”を持った人間である現実を見せつけられたことで、彼は自分の shrine が崩壊しつつあるのを感じたのである。

かくして Jim の adolescence は終わる。彼はきわめて独善的な disillusionment にうちのめされたまま Black Hawk の町を去り、州都 Lincoln の大学に入る。彼の Lincoln での学生生活と、その町に遅れてやって来た Lena との交流を描く Book III: Lena Lingard においては、二人の会話の中を除いて Antonia は全く登場しない。大学で彼は Gaston Cleric という優秀な若い学者の下で“the world of ideas”のすばらしさを知る。Jim は成人であり、この時期は彼の人生にとって Cleric と Lena のそれぞれに代表される scholarly world と physical world との両方を体験し、その板ばさみになっている時期である。前に見たように、Jim の世俗的成功へと至る将来が Lena Lingard との交際、つまり sexual love の世界への傾倒によって損なわれるのは、Antonia が懸念していた事態であり、それが現実となりそうになる。結局彼は Cleric の忠告を受け入れ、Lena のもとを去る決心をする。19才の彼は Nebraska を去り、Harvard に赴く。

2年後、Jim は Law School に入る前の夏帰郷する。Book IV: The Pioneer Woman's Story はその大部分が、彼が Widow Steavens という女性から、Antonia と Larry Donovan との恋愛の顛末を聞くという形式をとっており、Donovan と結婚するつもりで Denver に赴いた彼女が捨てられて故郷に戻り私生児を生む経過と、その話を聞いた後、Jim が Antonia を訪問する経緯が語られる。打ちひしがれているはずの Antonia の中に Jim は今まで全く知らなかった“a new kind of strength”を発見して驚く。Widow Steavens の言葉の中にあるごとく、Antonia の“a natural born mother”としての資質が顕われ始めているが、それが完全に開花した姿を Jim と読者が見るのは最後の章 Book V: Cuzak's Boys まで待たねばならない。そして、Antonia のこの母

性こそが、彼女と性的関係を持たず結婚するわけでもないのに“You really are a part of me.”(312)と告白する Jim Burden という男性に salvation を与え、しかも「現在」の彼に大きな喜びと楽しみの源泉となるものを生み出すという構図になっているのである。

Widow Steavens の話を聞いた後、Jim が Antonia に会って語る次の言葉は、本作全体の中でも最も首をかしげたくなるもので、批評家から様々に批判されてきた箇所である。

“I'd have liked to have you for a sweetheart, or a wife, or my mother or my sister – anything that a woman can be to a man.”(312)

W. J. Stucky が⁸、“there is little in the novel to support this”¹²⁾というように、この唐突な言に読者は戸惑う。Jim が作中で Antonia を sweetheart や wife にしようとしたことなど一度もない。Antonia と Donovan との絡みを記述する彼の文体に嫉妬も怒りもないし、Widow Steavens から Antonia の不幸な経緯を聞く彼に衝撃を受けた様子もない。“sweetheart, wife, mother, sister”を同列に並べてしまう彼の心情も理解しがたい。“my sister”や“my mother”的な間柄は開拓地と Black Hawk の町ですでに経験している。Antonia の自分に対する“kid”の様な取り扱いに不満な態度を見せながらも、実は内心では relationship without sex の関係に満足している Jim の様子はすでに見た通りである。また、真の意味での“sweetheart”としての関係は、彼自らが避けてきたことである。しかも“sweetheart”であろうと“wife”であろうと、成人した21才の Jim と24才の Antonia の間では、今からでも作れる関係である。ここで Cather の意図しているものが、単なる性を媒介とする関係を超越した、人間の魂と魂の根源的な結びつきであると解釈するのは容易であるが、いずれにせよ、この時点でわずか21歳の Jim が、それまでの二人の間を振り返って、遠い過去の思い出話にしまっているのは不思議である。

I wished I could be a little boy again, and that

my way could end here.(313)

わずか21才の彼にこのような子供時代への回帰願望があるのも奇妙である。だが、この Book IV の Jim の大げさに見えるせりふも、終章 Book V: Cuzak's Boys での Jim と Antonia の20年ぶりの再開と関連づけると大きな意味を持つ。“battered woman”と形容されながら Antonia は Jim に対して、“sweetheart, wife, mother, sister”のいずれでもないのに、彼の今後の人生に“full of pleasant things”の未来を与える存在になるのだ。それは何であろうか。

終章で、場面は20年後に飛び、“Introduction”で語られる Jim と Willa Cather らしき人物が会う日の数ヶ月前に戻ってくる。Jim は逡巡のあげくに Antonia を訪問する。

I did not want to find her aged and broken; I really dreaded it.(318)

Jim が、そして読者が20年ぶりに会える Antonia は、11人の子供の上に君臨する母親となっている。終章の Antonia の中に、一般の男性が女性に求める女としての魅力はない。それどころか、作者の描写はむしろ、Antonia の asexuality を強調している。彼女は“stalwart, brown woman, flat-chested, her curly brown hair a little grizzled”であり、歯も多くが欠けている。読者が disillusionment を味わうほどの形容である。ところが Jim は違う。sexuality や female charm と全く無縁となった Antonia の中に、彼が以前から認めていたあの“the fire of life”を再び発見する。

I had not been mistaken. She was a battered woman now, not a lovely girl; but she still had that something which fires the imagination, could still stop one's breath for a moment by a look or gesture... All the strong things of her heart came out in her body...

(353)

Jim には Antonia の肉体的魅力は必要ない。彼はこの“battered woman”の中に、昔と同じ

人生に対する ardor と vitality を見出す。そしてその源泉となっているものが彼女の fecundity である。本論で最も強調したいことは、彼女の“a rich mine of life”としての資質が結果として Jim Burden 自身の今後の人生を決定する図式となっていることである。場面は“Introduction”の数ヶ月前に戻っている。40歳台の Jim Burden に子供がいない事実を読者はここで思い出さねばならない。Antonia に作者が言わせる次のせりふは示唆的である。子供のいないことを Jim に告げられた彼女は言う。

“Oh, ain't that too bad! Maybe you could take one of my bad ones, now?”(325)

この Antonia のジョークの中に、彼女が Jim に対して果たす本質的な意味合いが示されている。子供たちはもちろん彼女と現在の夫 Anton Cuzak との間の子供であり、しかもその半分は娘たちである。にもかかわらず、この章のタイトルを“Cuzak's Boys”と名づけた作者の意図はどこにあるのだろうか。実はこの少年たちこそ、Jim 自身の今後の人生に大きな喜びと期待を与える存在となっているのである。この子供たちの well-mannered でたくましい姿を Jim は大いに強調する。男の子たちの一部とは納屋の“haymow”の中で一緒に寝る。彼は milking pails を持って牛舎に向かう年長の少年たちの間を歩きながら思う。

I felt like a boy in their company, and all manner of forgotten interests revived in me.(334)

Jim Burden の過去への回帰願望が満たされる場面の一つである。My Antonia が過去への憧憬に彩られた作品であることは間違いない。だが、読者は終章での Jim の Antonia の家族との交流、なかんずく Antonia の“boys”との交流の始まりにもっと積極的な意味を見つけるべきである。

Jim が年長の少年たちに語る思い出話や、“If you weren't nice to her, I think I'd take a club and go for the whole lot of you.”(335)などの言葉は、本来ならば父親のせりふである。彼が訪れる日、実の父親である Anton Cuzak を不在にしているのは、無論、作者の意図的な状況設定であ

る。Jim はここでは、父親の surrogate になっているのである。実はこれこそ Cather の意図したものに他ならない。Cuzak's boys は、家庭生活の喜びを知らない「現在」の Jim Burden が Antonia から受け取る最大の喜びなのである。

当時の開拓移民の親たちにとって最大の関心は次の世代を生きる自分の子供たちに “better chance” を与えること、彼らをより大きな世界に出すことであった。Antonia の家族は家族愛と調和にあふれた家族として幾分美化されて描写されているが、彼らは決して物質的に豊かな生活を享受しているわけではない。Jim が Antonia の家庭を訪問するのを長年躊躇してきたのも、彼らが “poor” だと聞いていたことが一因であった。Antonia が buttermaker として成功した女友達のことにふれ、*“Her children will have a grand chance”* というせりふがあるが、読者にとって興味深いことに、ここで彼女は自分自身の子供たちの “chance” については言及しない。翌日帰宅する Anton Cuzak も好人物であるが、子供たちに “grand chance” を与えられるほどの富を築くタイプの人間では全くない。

一見さりげない次の一文も象徴的である。

He (Anton) looked a little disappointed when his wife showed him a big box of candy I had got in Denver.... He put his candy away in the cupboard. (347)

Cuzak 家の子供たちに big candy box を送ることができるのは Anton ではなく Jim の方なのである。Nebraska の大地の果ての夕闇の中で牛の乳絞りをする少年たちを見て、Jim の中に少年たちに対する compassion が生まれる。

I began to feel the loneliness of the farm-boy at evening, when the chores seem everlastingly the same, and the world so far away. (336)

すでにこの時彼は、*“the world so far away”* に住むこの少年たちを世に送りだすことが、自分の使命であり喜びであることを認識しつつあるに違いない。それによってこそ家庭生活においては決して幸福とは言えない彼の人生に、情熱を向ける

に足るものが存在することになる。Anton Cuzak ではなくて彼こそ “Cuzak's boys” に “better chance” を、あるいは butter-maker の息子たちのような “grand chance” を与えることができる人物なのである。Book V が “Cuzak's Boys” と名付けられているのはこの事情からなのである。

彼は少年たちと別れづらくなっている自分に気づく。彼の意図が明らかになるのは、別れ際の少年たちとの会話である。

“Don't forget that you and Rudolph are going hunting with me up on the Niobrara next summer.” (357)

彼の hunting への招待は少年たちにとって夢のような申し出である。ここで、もう一度 “Introduction” を思い出さなければならない。結婚生活は不幸であるが、*“a big Western Dream”* を今なお信じている「現在の」Jim Burden が、新しい事業に挑もうとする夢にあふれた西部の若者たちに助言や財政的援助を行うことに情熱を傾けていることを、読者はすでに知っている。そのような若者たちをまず hunting に誘うのが彼の流儀であることも “Introduction” から明らかである。Jim Burden はそれを Antonia の息子たちに対して行おうとしているのである。彼は今やこの息子たちの父親である。*“part of me”* と彼自らが表現する Antonia との間に性関係なしに子供を持つことができたのである。もちろんこの少年たちは surrogate である。だが彼らは壮年期に達している Jim の未来に新たな情熱と生き甲斐をもたらすことになるのである。かつて Granville Hicks らが批判したように、この小説が、単に過去への nostalgia から書かれた、古きよき過去を懐かしむだけの escapism 的回想録とは趣を異にするものであることはこの理由からである。若者たちを hunting に招待した Jim の心の中にはすでに次の計画が決まっている。

...my mind was full of pleasant things; trips I meant to take with the Cuzak boys.... There were enough Cuzaks to play with for a long while yet. (358)

かくして彼の今後の人生に、光明が見え始めるのである。

最後に付加しておくべきは Antonia の夫、Anton Cuzak の役割である。Willa Cather 自身が結婚という男女関係に疑念を持っていたのは間違いないことであるが、その事実が顔をのぞかせているのだ。彼はもともと “lighted streets” の好きな “city-bred” であり、現在でもそうだとする。その彼を Antonia は “one of the loneliest countries in the world” たる Nebraska の開拓地に引き留めたのである。以下の Jim の感想は当然に作者自身の結婚観を反映している。

It did rather seem to me that Cuzak had been made the instrument of Antonia's special mission. This was a fine life, certainly, but it wasn't the kind of life he had wanted to live. I wondered whether the life that was right for one was ever right for two! (355)

Anton の資質はその “a rich mine of life, like the founders of early races” としての役割にあった。次の一文は本作品の中でも最も有名な imagery の一つとなっており、Antonia と子供たちが一体となって写真を見ている場面の描写である。

In the group about Antonia I was conscious of a kind of physical harmony. (338)

ところがこの中には、夫の Anton はいない。要するに、 “the instrument of Antonia's special mission” としての Anton の役割は、Antonia を母親にすること、Antonia に子供を与えることである。Jim Burden には決してできなかったこの役割を担ったのが Anton であり、そして彼によって作られた Antonia の子供たちは、Jim の surrogate children としての役を果たすことになる。いまや Jim と Anton Cuzak は Antonia を共有している。この二人の間にはそれが可能なのである。同じ女性を自分の妻として愛する男と、自分の偶像として奉ずる男の間に友情が生まれる。次の Jim の言はそのことを Jim が認識している結果である。

Even after the boys grew up, there would always be Cuzak himself! I meant to tramp along a few miles of lighted streets with Cuzak. (358)

性を媒介とした男女関係を忌避する Jim Burden にとって、これから続く Antonia との関係、“battered woman” でありながらも、昔ながらの vitality や情熱を失っていない asexual な Antonia との付き合いは彼にとって、安全で恐れる必要がない。しかも彼の “idealization” が今後裏切られる危惧もないのである。

かくして、作者の agent である Jim Burden は、作者から使命を受けた relationship without sexuality を、Antonia との間に全うする結果となり、しかも今後の人生への大きな expectation を与えてくれる子供たちを持つことができ、彼らが成長した後には、人生を share できる Anton Cuzak という友人まで手に入れたのである。“Introduction” における portfolio を小脇に抱えて叩いて見せた時の彼の幸福は、読者にも納得できるのである。Jim の Antonia に対する言、 “I'd have liked to have you for... anything that a woman can be to a man” はこのようにして実現されたわけである。

注

- 1) Sharon O'Brien (ed.), *New Essays on My Antonia* (Cambridge : Cambridge University Press, 1999), p.20
- 2) Sharon O'Brien (ed.), *op. cit.*, p.20
- 3) Harold Bloom (ed.), *Antonia* (New York : Chelsea House Publishers, 1991), p.168
- 4) John. H. Randall III, *The Landscape and the Looking Glass* (Westport, Connecticut : Greenwood Press, Publishers, 1960), p.122
- 5) Bernice Slote and Virginia Faulkner (ed.) *The Art of Willa Cather* (Lincoln : University of Nebraska Press, 1974), p.14
- 6) Mildred R. Bennett, *The World of Willa Cather* (Lincoln : University of Nebraska Press, 1961), p.47
- 7) Harold Bloom (ed.), *op. cit.*, p.101
- 8) 1918年版には冒頭の “Introduction” の中に “I, as

a little girl...”という語句があり、この“I”が女性であることが明示されるが、1926年版ではその部分は削除されている。

- 9) Willa Cather, *My Antonia* (Lincoln : University of Nebraska Press, 1994) 以下の *My Antonia* の引用はすべてこの版により、括弧内に頁番号を示す。
- 10) Suzan Rosowski, *The Voyage Perilous : Willa Cather's Romanticism* (Lincoln : University of Nebraska Press, 1986), p.89
- 11) Bloom, *op. cit.*, p.100
- 12) Bloom, *op. cit.*, p.97